

樋口一葉『うもれ木』考

萩原, 進 / HAGIWARA, Susumu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

76

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

175

(終了ページ / End Page)

194

(発行年 / Year)

2009-03-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003950>

# 樋口一葉『うもれ木』考

萩原 進

## 目次

### はじめに

#### 1. 薩摩焼のふるさとを旅して

1) 何ゆえ薩摩焼が京都や横浜で絵付されていたのか

2) 美山を訪れて

(1) 美山の町並

(以上本号)

(2) 沈壽官窯を訪ねて

3) 『うもれ木』と『故郷忘じがたく候』の温度差

#### 2. 『うもれ木』の時代背景——夢の陶器：錦手の白薩摩

1) 薩摩藩の殖産興業政策と錦手白薩摩の登場

2) 明治政府の殖産興業政策——窯業の輸出産業化

3) 明治初期貿易の混乱—京薩摩と横浜薩摩

#### 3. 『うもれ木』考

1) 縦系と横系

2) 入江籟三は陶芸作家にあらざ

3) 詐欺師を愛してしまったお蝶

4) 謎の男篠原辰雄

#### 4. おわりに——セーブル美術館特別展『SATSUMA』（2007年）

## はじめに

平成13年（2001年）の秋、ゼミの教え子や卒業生たちが、還暦を迎えたわたくしのために盛大な祝賀会を開いてくれた。祝いの席で真っ赤なチャンコンコを着せられ、いささか恥ずかしい思いがしなくてもなかったが、正直いって長い教師生活のなかでこのときほど幸福な気分には浸れたことはなかったように思う。

還暦を祝ってくれたゼミの卒業生たちに、何かささやかなお返しをしたと思って、これまで書きためてきた樋口一葉に関する随想を『「たけくらべ」を読む』と題する小冊子にまとめ、300名ほどの卒業生全員に贈呈することにした。一介の経済学徒に過ぎない者が、畑違いの文学の分野の本を出すということは、いささか羞恥心に欠ける行為のように思われるのだが、一葉文学に深く傾倒しているわたくしとしては、いたしかたがないことなのであった。

『「たけくらべ」を読む』（揺籃社）を出した後もわたくしは、一葉文学に関する研究を本業の仕事の合間をぬって細々と続けている。2004年には『多摩論集』（法政大学）に、『「たけくらべ」のかくし味』と題する小論を発表した。これをもって『たけくらべ』の研究には一応ピリオドを打ち、次はいよいよ念願の『一葉日記』の研究に移ろうと意気込んでいたのである。しかし『一葉日記』の研究は、その後一向に進んでいない。それゆえであろうか、友人から、“あれほど好きだった樋口一葉への熱もすっかり冷めてしまったようだ”などと茶化されたりする始末であった。

『一葉日記』の研究を目下中断しているのは事実であるが、けっして断念してしまったわけではない。中断しているのは、文学作品を読むために使えるわずかな時間を、最近はおそらく『源氏物語』の読書に振り向けているからである。『一葉日記』の研究に入る前に、『源氏物語』の全巻をなんとかして通読しておきたいと、最近しきりに考えるようになった。

ある時期から一葉の小説には、『源氏物語』後半の宇治十帖の世界に揺曳している生のはかなさに対する哀調を帯びた共鳴感が、色濃く現れてくるように思われるのである。一葉の後期の作品のすべてに、生に対する“虚無”的な情感が通低音のように漂っている。後期の作品に流れている一葉特有の無常観、あるいは生に対する虚無的な情感は、父を失った直後から一葉をさいなみ続けた生活上の不如意と精神的な疲れがもたらしたものであろう。しかし同時に、歌人であった一葉が日本の古典文学から受け継いだ影響を無視することはできないように思われる。わたくしは、一葉に影響を与えた古典文学として、勅撰和歌集とともに『源氏物語』と『徒然草』を特に重視しなければならないと思っている。一葉は『源氏物語』を何度も繰り返して読んでいたといわれている。

『源氏物語』の無常観を一葉はどう受け取っていたのか、そのことをまず、『一葉日記』の研究を始める前に明らかにしておく必要がある。『たくくらべ』や『十三夜』を読みながらわたくしの脳裡にしばしば浮かんだことは、一葉が晩年に抱いていた独特な無常観こそが、“最後の14ヶ月”（和田芳恵）の名作群を理解するうえでの鍵なのであり、一葉の無常観は『源氏物語』の無常観とどこかでつながっているのではないか、ということであった。

そんなわけで平成17年（2005年）頃から、思いきって『源氏物語』を、谷崎潤一郎訳や瀬戸内寂聴訳のような現代語訳ではなく、オリジナルの原文で読み始めることにしたのである。しかしあの長大な『源氏物語』全巻の通読は、わたくしのような古典文学の素養に乏しい者にとっては大変な難事であり、読了するには膨大なエネルギーと恐らく数年以上の歳月を要するにちがいない。『源氏物語』を毎日少なくとも30分以上は読むことにしているのだが、読み始めてからすでに3年になるというのに、まだ「花宴」の巻も読み終えていない始末である。蝸牛よりはるかに遅い歩みというほかないが、定年で大学を退職するまでにはなんとか読み終えたいと念

願している。

そういうわけで一葉文学について論文を書く機会は、当分やって来ることはないであろうと思っていた。しかし奇遇にも、NHKが2008年の大河ドラマ『篤姫』（宮尾登美子作）の放送を開始するとともに、事情が変わってきた。わたくしは、大河ドラマ『篤姫』にすっかり魅了されてしまい、さっそく宮尾登美子さんの原作『天璋院篤姫』を読んでみることにした。さらに篤姫に関する様々な文献をできるだけ手広く集めて、手当たり次第に読み漁った。その結果宮尾登美子さんの『篤姫』という作品は、幕末維新时期をえがいた無数の時代小説のなかにあって、際立ってユニークな作品であることがわかった。

宮尾登美子さんの『篤姫』は、篤姫の生涯を、これまでどの作家も試みたことがない独特の角度から照射している。その意味で非常に風変わりな異色の作品といえるのである。ドラマ『篤姫』のシナリオも、宮尾登美子さんの『篤姫』を下敷きにして書かれているうえに、シナリオ・ライターの田淵久美子さんが時代考証を担当した歴史学者の原口泉さんの小松帯刀に関する新研究を素材にして書いたために、きわめてユニークなドラマになったのである。ドラマ『篤姫』の風変わりな点は、若くして薩摩藩の城代家老になった小松帯刀の生涯を中心に据え、篤姫に対して小松帯刀が終生抱き続けた慕情を軸にして作品を構成している点である。小松帯刀はこのドラマのたんなる脇役ではなく、篤姫とともに主演の役割を割り振られている。小松帯刀を演じた俳優瑛太の出演の頻度が、非常に高かったのはそのためである。視聴者はドラマを見ながら、毎週のように、小松帯刀が幕末の政局においてはたした役割について考えさせられたことであろう。幕末維新时期を扱ったドラマに登場する薩摩藩士といえば、西郷隆盛や大久保利通と相場が決まっている。家老の小松帯刀を幕末政局のキーパーソンに据えたうえで、大奥にいる篤姫の眼を通して幕末の日本の動きを見てい

く『篤姫』は、きわめてユニークな作品なのである。

小松帯刀は、幕末維新期の薩摩藩を文字通り取り仕切った城代家老であった。西郷・大久保ら改革派の精忠組（せいちゅうぐみ）を陰に陽にバックアップしただけでなく、幕末の政争で出費がかさむ藩財政を支えるために、殖産興業に特に力を入れた経済通の家老としても知られている。明治政府の殖産興業政策は、小松帯刀と腹心の部下であった五大友厚らが、薩摩藩において立ち上げた種々の殖産興業政策に淵源するといわれている。慶応3年（1867年）のパリ万博に、琉球・薩摩王国として幕府とは別個に参加し、薩摩焼などの美術品を出品して西欧諸国の好評を博することができたのも、小松帯刀の努力の所産であった。

ドラマ『篤姫』を見ながら、わたくしの想像の焦点はおのずと、小松帯刀その人から小松帯刀が試みた薩摩焼の輸出に、そして薩摩焼の貿易事業から薩摩焼の絵付師を主題にした一葉の『うもれ木』へと移っていった。このようなしだいでドラマ『篤姫』に刺激を受けて、わたくしはもう一度丁寧に、一葉の『うもれ木』を読み直すことになったのである。

『うもれ木』は、明治25年に、一流の文芸雑誌であった『都の花』に発表された一葉の初期の作品である。文壇への本格的なデビュー作だったともいわれている。一葉はこの作品を20歳のときに書いた。わたくしは、だいぶ前にザッと読んだだけなので、『うもれ木』の筋立てについてさえも記憶が定かでおぼろげであった。薩摩焼の若い絵付師の一徹で愚直な生き方を描いた作品といった程度の印象しか残っていなかった。

しかし久しぶりにていねいに読み直してみて、いろいろなことを考えさせられた。『うもれ木』の主人公である入江籟三（いりえらいぞう）は、錦手（にしきで）白薩摩の絵付を得意とする東京の絵付師であることがわかった。昔読んだときには、薩摩焼の絵付にはほとんど関心が向かず、錦手

白薩摩については、ひとかけらの知識すら持ちあわせていなかった。錦手白薩摩に関する知識なくしては、この作品を理解することはほとんど不可能なのである。一葉文学の研究者としてまことに恥かしい次第であるが、錦手白薩摩が幕末維新期に輸出向けに京都や横浜で量産されていた事実を知ったのは、なんと昨年の2008年のことなのである。

## 1. 薩摩焼のふるさとを旅して

### 1) 何ゆえに薩摩焼が京都や横浜で絵付されていたのか

一葉には二人の兄がいた。長兄の泉太郎は一葉より8歳年長で、おとなしい勉強好きの青年であったと言われている。明治法律学校を中退して大蔵省出納局の雇に採用され、親から将来を囑望されていた孝行息子であったが、明治20年に23歳の若さで亡くなっている。死因は肺結核だったと言われている。泉太郎に良く似た温厚な人物が、一葉の作品にはしばしば登場する。『たけくらべ』の藤本信如や『にぎりえ』の結城朝之助には、兄・泉太郎の形象が投影されているようである。

次兄の虎之助は慶応2年生まれなので、明治5年生まれの一葉よりは6歳年長であった。虎之助は、明治14年に15歳のときに樋口家の籍を抜かれ、陶芸家の成瀬誠至（なるせせいし）の元に弟子入りさせられている。分籍の理由はハッキリとはわかっていない。家の書画骨董を質に入れて遊ぶなどの非行のために、勘当されたとも言われている。虎之助という人は、芸術家肌のボフェミアンのようなタイプの人であった。親が期待していたような、将来“官員さん”（役人）の職にでも就いて出世していくような人物ではまったくなかった。そんな生真面目な生き方は、虎之助の肌にならなかったのであろう。両親はそんな虎之助の将来を案じて、手に職をつけさせるしかないと考え、分籍したうえで陶芸の親方のもとに弟子入りさせたのかもしれない。成瀬誠至は、薩摩焼の絵付師として東京では名声の高か

った陶芸家の一人であった。(虎之助が、薩摩焼の絵付職人の道を選んだ時代的背景については後述する。)

一葉は、職人氣質の次兄の虎之助とは気が合っていたようで、たいへん仲が良かったといわれている。東京都台東区の一葉記念館には、一葉の多くの遺品が陳列されているが、虎之助から一葉に贈られた一對の小さな花瓶が同館に展示されている。一葉は、兄から贈られたこの花瓶を大切に所蔵していた。記念館に展示されている花瓶には、絵付に金泥が用いられているところから、錦手の技法で描かれた白薩摩の花瓶であることがわかる。虎之助のいつ頃の作品なのか、残念なことに製作年代は不明である。美術品として一応評価に値する作品だったようである。いずれにしても一葉の『うもれ木』は、絵付師であった兄の虎之助から得た素材を材料にし、陶芸の技術面についても虎之助から色々と教示を受けて、はじめて書きあげることができた作品なのである。

一葉の作品には、芯の弱い“不良”のような青年でありながらどこか憎めないところのある不思議な人物が、しばしば登場する。『大つごもり』に出てくる山村家の総領息子の山村石之助は、地廻りのチンピラに成り下っている遊び人であるが、じつにすがすがしい感じのする好青年でもあるのだ。『琴の音』の主人公である渡辺金吾は、不幸な生い立ちから盗賊に身を落としているが、14歳のときに盗みに入ろうとした屋敷の庭で聴いた琴の音に感動して、更生の道を歩み始めるというのである。ここにも、盗人でありながら生真面目な面を捨てきれない青年が、登場するのである。いずれの人物も、15歳のときに絵付職人の徒弟修業に入った虎之助に、どこか似ているところをもっている。

『うもれ木』に出てくる篠原辰雄という人物も、表の顔は名の通った慈善事業家でありながら、裏では慈善事業に使うカネをあこぎな手段を使って集める、れっきとした詐欺師なのである。篠原辰雄は、二重人格をもった

不思議な人物として描かれている。そのために『うもれ木』という作品は、たいへん難解な作品になってしまっており、解釈のあちこちにアポリアを残しているのである。篠原辰雄は、虎之助をイメージして創作された人物のようにわたくしには見てとれるのであるが、どうであろうか。

虎之助が製作した一対の花瓶を眺めていると、様々な疑問が次々と湧いてくる。薩摩焼は、薩摩藩の専売品であるから、もっぱら薩摩で製作されていたはずである。特に白薩摩は、藩が経営する藩窯で独占的に製作されており、島津家の贈答品として特製されていた美術品なのである。大名の藩窯は、“御庭焼”（おにわやき）と呼ばれているが、錦手の白薩摩は典型的な“御庭焼”の一つなのであった。その白薩摩の絵付が、どうして東京で行われていたのであろうか。

虎之助は、東京の陶芸家であった成瀬誠至の元で徒弟の修行をし、錦手白薩摩の絵付師になった。陶磁器の生産は、京焼とか有田焼とかの名称からも明らかのように、地域と結びついた地場産業として行われてきている。だから産地の地名を付した銘柄品として売られているのである。もともと地域に根ざした地場産業として発展した窯業の世界に、薩摩ではなく東京や京都で製作された薩摩焼のような珍奇なものが存在していた事実は、どう説明したらよいのであろうか。ミステリーとしかいいようがないできごとである。

幕末から明治前期にかけて、輸出向けの美術品として白薩摩が大量に生産されていた。薩摩で成形され素焼された薩摩焼の半製品が、船で横浜や京都に運ばれてきて、京都や東京で絵付されて国際貿易港から輸出されていたという。横浜で絵付されて横浜港から輸出されていた薩摩焼は“横浜薩摩”と呼ばれており、それに対して、京都滝口（たきのくち）で絵付され神戸港から輸出されていた薩摩焼は京薩摩と呼ばれていた。現在でも古陶磁の骨董品市場においては、横浜薩摩とか京薩摩という言葉が通用している。

陶磁器の生産過程は、陶土の購入から製品である陶磁器の出荷に至るまでさまざまな工程から成りたっており、作業は多くの職人たちによる分業の形をとって行われている。いわゆる陶芸作家の場合は、作家が一人ですべての作業を行うことが多いが、陶磁器を量産している窯業としての“窯”（＝工場）においては、成型から焼成・絵付に至る作業のすべてが専門化されている。成型は型師の仕事であり、絵付は絵付師の仕事なのである。しかしながら成型であれ、焼成であれ、絵付であれいずれの作業も、“窯”と呼ばれる工場の内部で工場内の一工程として遂行されているのである。分業にもとづく協業という工場生産の形態をとるマニュファクチャーこそが、明治期の窯業の一般的な生産方式であった。そうであるならば、幕末維新时期から明治前期にかけて、焼成までは薩摩で行い絵付は京都や東京や横浜で行うといった変則的な方式が取られていたのは何故なのであろうか。謎である。

薩摩焼と同じく藩窯であった“鍋島”や“九谷”には、横浜鍋島とか京九谷などといった変な焼物は生まれなかったのである。なぜ薩摩焼だけに、そのような謎めいた出来事が起こったのであろうか。この点もやはり謎である。

これらもろもろの謎を解くには、薩摩焼に関する文献に広くあたってみる必要がある。そこでさっそくわたくしは、薩摩焼に関係のある本の収集に乗り出し、薩摩焼関係の専門書をインターネットで買い集めることにしたのである。薩摩焼に関する専門書はそれほど多くはなかったが、幸い田沢金吾・小山富士夫共著の大作『薩摩焼の研究』（1941年）、沈壽官『日本のやきもの・薩摩』（1986年）、二階堂充『宮川香山と横浜真葛焼』（2000年）をはじめとして、重要文献の大半を入手することができた。それらの書物にザッと眼を通して見たのだが、困ったことに肝心要の幕末維新时期の薩摩焼に関する記述ははなはだ手薄で、『うもれ木』の時代的背景を知ろうえあまり役に立たないことがわかった。二階堂充さんの『宮川香山と横浜真葛焼』は、明治期の金襴手白薩摩を代表する陶芸家であった宮川香山

に関する本格的な研究であり、たいへん参考になった。しかし、宮川香山が横浜に窯を開くに至った経過、とりわけその過程で小松帯刀がはたした役割についての記述が、あまりにも少なく物足りなさを覚えざるを得なかった。

文献にもとづく探索が壁にぶつかってしまった場合、残された手段としては現地取材しかないのである。現地調査にまさる研究方法はないというのが、長年労働市場研究をやってきた者の実感である。何ゆえに白薩摩が、わざわざ京都や東京で絵付されて外国に輸出されていたのであろうか。この謎を解くためには、薩摩の現地を旅しながら調べていくしかすべがないのではないか。というわけで、2008年の8月末に、夏休を利用して薩摩旅行をすることに決めて、7月から鋭意準備を始めた。

## 2) 美山を訪れて

鹿児島を旅行するのは、これで2度目である。最初の旅行は、1970年代の初めの頃のことで、もう30年以上も前のことになる。たしかあの時は、自治労に講演を依頼されて鹿児島市を訪れたついでに、急いで観光コースをバスで廻って東京に戻ったのではないかと、といった程度の記憶しか残っていない。桜島を観光バスでひと廻りしたことと、磯庭園で記念に薩摩切子を買ったことだけは今でも鮮明に覚えている。

今回の旅行は、観光が目的ではなく、現存している薩摩焼の窯元を訪問し、薩摩焼に関する資料をできるだけ集めることが目的である。現在企業として残っている薩摩焼の窯は、ごくわずかしかない。しかし沈壽官さんの窯は、今も健在であり、15代目の沈壽官さんは、現在陶芸作家としてめざましい活躍をされている。

有田や益子などの他の産地に較べると、薩摩焼の衰退ぶりは際立ってい

るように思われる。明治以降に薩摩焼が急速に衰退していったのはなぜなのだろうか。薩摩窯業史の専門家によると、薩摩焼衰退の原因は二つあるという。第一は、明治維新後の改革とりわけ廃藩置県と秩禄処分によって、藩主島津家の藩窯を維持していくことが困難になったからである。薩摩焼のスポンサーであった島津家が没落した場合、誰が窯を維持してくれるのであろうか。第二は、薩摩焼の場合、陶器から磁器への転換に必要な環境にめぐまれていなかったという事情がある。窯業史の専門家はその点について次のように指摘している。

「時代の追移にしたがって、陶器は磁器に追われていったが、陶器を本流としていた薩摩では、領内に原料の磁石がなく、原料は肥前から移入していたし、磁器焼成の燃料としての石灰も自給できなかったので、製品のコストの関係上、企業としては、磁器時代の到来に適応できなかった」（日本陶磁体系 16 薩摩 89頁）

しかしながら、だからこそ薩摩は、磁器では得られない温かみのある独特な陶器としての白薩摩を、今日に残すことができたとも言えるのである。薩摩焼は、かつて苗代川と呼ばれていた地域で、細々とはあるが今日においても製作され続けている。そこには沈壽官さんの窯もあるのだ。

わたくしの専門は、労働市場と労使関係の研究である。この分野は、経済学のなかで社会調査をもっとも重視する。社会調査といっても様々なメソッドがあるのだが、労働研究において重視されているのは、参与観察と面接調査である。このような泥臭い風変わりな分野を専攻しているせいか、「実際にこの眼で確かめたこと以外は信じない」〔Seeing is believing.〕クセがついてしまったのである。薩摩焼が、明治期になぜ東京や京都で製作されていたのかという謎を解くために、わざわざ鹿児島まで調べに行くことはないのかもしれない。フィールドリサーチをやってみないと納得でき

ないというクセのせいで、自然に鹿児島行きを決めてしまったわけである。

わたくしは、工場調査には比較的慣れていると思っている。しかし慣れているとはいえ、工場調査は一人で行うのは容易ではないのである。なぜかという、工場で現場の人から聞き取りをする場合、話を聴きながらメモを取ったり、カメラで写真を撮ったり、時にはテープに録音したりなどの作業を、同時に行わなければならない事態が、わりと頻繁に起こるからである。これらの作業を全部一人でこなすのはとうてい無理で、当然助手が必要になる。

幸い大学で教鞭を取っているわたくしには、ゼミという便利な場があるので、調査の助手を確保するのは比較的容易である。今回の鹿児島窯業の旅にも、ゼミの教え子の協力を仰いだ。ゼミの卒業生で、現在早大の大学院で日本経済史を専攻している学生なのであるが、福岡出身なので調査に同行してもらうことにした。名前は阪東俊一という。阪東君は、写真が趣味である上に現地調査（フィールドワーク）が大好きときているので、取材旅行の助手には打ってつけなのである。

調査旅行とはいっても、ドラマ『篤姫』に沸いている薩摩の地を旅するわけだから、今泉島津家の居城があった指宿に立ち寄るなど、多少は観光にも時間をあてることにした。勿論夜は居酒屋で、薩摩揚げを肴に焼酎を楽しむことも予定に入れておくべきである。

我々は、いろいろなところを訪ねたが、薩摩焼に関係した訪問先としては非書き残しておくべきだと思われるのは、現在は美山（みやま）と呼ばれているかつての苗代川窯業地域である。もう一つは、指宿でホテルを営んでいる株式会社・指宿白水館が、平成20年2月に美術館の薩摩伝承館をオープンさせ、同年8月に薩摩焼の特別展を開催していたことである。奇しき偶然であるが、われわれが指宿を旅していたときに伝承館が薩摩焼の特別展を催していたのである。伝承館については、平成19年にフランス





# 美山案内図

さつま焼の里  
ざわざわ歌う竹林に囲まれた美山の里  
青風にふかれてそぞろ歩けば  
陶工たちの熱い想いが伝わります。

**瀧川錦手窯(絵付)**  
瀧川英男  
☎二七四一二五九

錦手様は自己の感性による独特のものを心掛け、茶碗はそれぞれの流派の注文嗜好に応じて、オリジナリティー豊かに製作しています。

**荒木陶窯**  
荒木幹一郎  
☎二七四一二七三

苗代川境の伝統を現代に開花させた作品は、おらかな人間味に溢れ、水年培われてきた技術の結晶は様な技法に表現されています。

喫茶  
アツアルミント

**桂木陶芸**  
桂木武  
☎二七四一三〇七

白磁、黒磁等を製作しています。伝統的な技法を基に、現代的なセンスを生かした独特な作品づくりには、お客様の戸を反映しています。

**秋浦窯**  
阿多潤一郎  
☎二七四一四四〇

自分を打ち出した仕事を続け、特に妻の表現で個性を見せています。作品は、花器を中心に、生活に根ざした食器類も製作しています。

**泰京窯**  
☎二七四一三〇七

記念館 1370

福島輪廻

至伊集院・鹿兒島 →

案内板

山陶遊館  
☎(099)274-5778

400年窯

林間アスレチック広場



寛永17年(西暦1640年)ごろ郷士黒川大煥兵衛によって発見され、明治4年の廃藩置縣のころまでは、島津藩の御前湯・地頭湯もありました。

現在、44カ所の泉源からは、単純硫黄泉・単純温泉で無色透明の温泉が湧出し、皮膚病、胃腸病、神経痛、婦人病などに効果があります。

陶郷美山(旧苗代川)めぐりのあと、車で5分の湯の元温泉で旅の疲れをゆっくりにやしていただければ、旅情はより深いものとなります。

お問い合わせ先 東市来町役場 Tel(099)274-2111

美山には、鹿児島本線を使って行くことにした。

かつて鹿児島本線といえば、九州を南北に縦断する交通の大動脈であった。しかし九州新幹線が、八代と鹿児島間を通るようになってから、鹿児島本線は、西鹿児島駅と川内（せんだい）駅をつなぐ田舎のローカル線に様変わりしてしまった。我々は、鹿児島中央駅で鹿児島本線に乗り込み伊集院に向かったのだが、夏休中のせいか通学生の利用はごくわずかであった上に、一般乗客もまばらで車内はガラ空きであった。

福岡と鹿児島をつないでいた昔の鹿児島本線の特急は、今は福岡と八代間を走っているだけで、この特急も、九州新幹線が全線開通するまでの残るわずかな期間が過ぎてしまえば、どこかの交通公園で余生を過ごすことになるのであろう。八代駅と川内駅の間は、肥薩おれんじ鉄道という今はやりの“三セク”（半官半民の第3セクター）の企業が、JR九州から鹿児島本線の一部を引き継いで経営している。

福岡出身の阪東君は、九州をくまなく旅しているので、九州経済に関して一家言をもっている。阪東君によると、九州の経済地理は、九州新幹線の開通によって——まだ全線が開通しているわけではない——激変しつつあるという。彼の言葉を使うと、“日本全体が東京一極集中を進行させているだけでなく、九州全体でも福岡一極集中が進行している”のだそうである。九州では、各地の企業が本社をドンドン福岡に移しており、国の出先機関や施設もほとんど福岡に集中している。企業や行政だけではなく、美術館や博物館、スポーツ施設や私立名門校など、あらゆる文化的な施設が福岡に集中してきているのだそうである。

たしかに最近の福岡市の繁栄振りとはにぎわいには、眼を見張るものがある。福岡ドームができてから以降、プロ野球の中心は、東京から福岡に移ってしまったかのようである。わたくしは鹿児島に発つ前に、福岡で阪東君の父親にお会いして一献傾けることにしていた。福岡に一泊してから、

翌日鹿児島本線の特急で鹿児島に向かう予定だったのである。阪東君はわたくしを連れて、福岡の名所をあちこち案内してくれたが、大宰府天満宮の近くにできた博物館を見学して驚いた。

立派な国立博物館で、東京大学史料編纂所の全史料を保管しているという。NHKのドラマ『篤姫』にあやかって篤姫関係の展示も行ってしたが、特に素晴らしかったのは、島津家が所蔵してきた鎌倉時代から幕末にいたる重要文書のすべてを、特別展で公開していたことである。わたくしは、めったに見ることができない古文書類をこの眼でしかと確かめつつ、興奮を感じざるをえなかった。鎌倉幕府が島津氏宛てに出した所領安堵の文書や、豊臣秀吉が出した慶長の役への出兵要請など、本当に興味津々の史料の連続であった。阪東君がいう通り、九州では福岡一極集中が急速に進行しているのかもしれない。

鹿児島中央駅から伊集院に向かう鹿児島本線の車窓から、西薩摩の山なみを眺めていると、中山間地の農村風景が果てしなく変哲もなく続いていることがわかる。薩摩では、鶴丸城下の鹿児島だけが例外的に城下町を形成していたが、鹿児島以外は外城のあった地を含めて、すべて鄙の里の田舎に過ぎなかったのではないであろうか。京と江戸を結ぶ東海道には、あちこちに本陣や脇本陣が置かれて大きな宿場町が形成されていたのだが、江戸時代の薩摩街道や人吉街道などの街道筋には、はたして宿場町といえるような町が形成されていたのであろうか。

鹿児島本線の沿線には、現在三つの市が連なっているが、市とはいってもいづれも市域が広大なわりには人口が少ない典型的な過疎地域なのである。人口密度は日置市が1平方キロメートル当たり203人、いちき串木野市が283人、薩摩川内市が147人で、いづれも広い農村を背景に小さな町が点在している鄙の里といってよい。日置市は、2005年に旧日置郡の4町（伊集院町、東市来町、日吉町、吹上町）の町村合併によって誕生した新しい市で、最近では鹿児島市のベッドタウンとして発展しているといわれている。

我々は伊集院駅で下車して、駅前タクシーを拾って美山に向かった。途中“まぼろしの宰相・小松帯刀の郷”と書かれた幟が、あちこちに立てられているのが眼に入り、一所持の上士であった小松家の故郷が日置であったことを思い出した。

美山は行政区としては日置市東いちき町地区に属している。伊集院駅からタクシーで15分ほど行くと、美山地区に着く。タクシーの運転手から、“美山陶遊館で観光案内をもらってから窯を歩いて廻るといいですよ”といわれていたので、まず陶遊館を訪ねることにした。

美山の町の真ん中を、細い街道が走っている。夏の昼下がりのせいであろうか、道ゆく人は一人もいない。クルマもほとんど走っていない。まるでゴースト・タウンのような静けさが、小さな町の全体を蔽っている。きれいな静かな町である。

この小さな町に、薩摩焼を焼いている窯が12~13軒ほどある。窯業地帯としては、窯が今でも残っているといった方が適切なほど、衰微した感じがする。

ここが、朝鮮陶工たちがつくってきたあの苗代川なのだ。今は一見すると、廃れてしまった窯業の町のように見えるが、けっして薩摩焼の博物館になってしまったわけではない。いまだに薩摩焼は、この小さな町で今も現役でがんばっているのである。わたくしが購入した、第15代沈壽官作の錦手白薩摩の花瓶（写真）を見ていただきたい。なんと気品に満ちた温もりのある陶器なのであろうか。

わたくしは長いこと、苗代川は小川の名なのだろうだと思っていた。しかし美山を散策してみてわかったことは、小川などはどこにも流れていないのである。陶遊館で店番の女性に、“川もないのに苗代川という地名はヘンな地名ですね”というのと、“皆さんそうおっしゃいますね”と笑ってい



第15代 沈壽官作・錦手白薩摩の花瓶



沈壽官窯の黒薩摩の花瓶

た。陶遊館の店員さんは、たいへん面白い人で、一葉の『うもれ木』に出てくる陶芸家の朴正官の窯について尋ねると、じつにユーモラスな答えが返ってきた。

この話は取っておきの話なので、節を改めて紹介することにしたい。

Ichiyo Higuchi's *Umoregi* and Satsuma Pottery

Susumu HAGIWARA

## 《Abstract》

One of Ichiyo Higuchi's early short novels, *Umoregi*, portrays the tragic life of a Satsuma potter. The protagonist, Raizo Irie, dreams of becoming a great Satsuma potter, but is too poor to build a pottery atelier. He is a dreamer, who will never earn profits from pottery, so his sister Ocho supports him by working as a maid.

One day, Raizo is lucky to meet a wealthy sponsor who was a fellow potter during their apprenticeship. Ocho falls in love with this sponsor. Raizo finally succeeds in creating an excellent Satsuma piece. However, he discovers that the true intent of the sponsor is to make Ocho into a prostitute to get money, and he smashes the Satsuma pottery into pieces.

This article analyzes this novel by casting light on Satsuma pottery in the Meiji period.